

記憶の被爆された託

少女は「海ゆかば」を歌いながら死んだ。目の前で

愛媛大生ら広島訪問



広島東照宮の久保田訓章宮司(中央奥)から被爆体験を聞く愛媛大生 11月6日午後、広島市

「愛媛で話したい」に体験者聞き取り

愛媛大で時事問題などの研究をしている学生グループが被爆から69年を迎えた広島を訪れ、被爆体験に耳を傾けるなど平和について学んでいる。6日には、原爆で本殿や拜殿が倒壊、焼失した広島東照宮(広島市東区二葉の里2丁目)を訪問、当時中学1年生だった久保田訓章宮司(82)の体験を聞き、学生らは「自分たちが語り継がなければ」との思いをあらたにした。

訪れたのは、愛媛大のサークル「総合科学研究会」のメンバー13人。広島平和記念資料館で来館者への解説ボランティアをしている

広島市の小学校教諭大西知子さん(65)と松前町出身の同サークルの顧問に親交があったことから実現した。1945年8月6日。当時の広島市内の中学1年生5800人は、空襲などでの延焼を食い止める建物疎開作業中だった。久保田さんらの学校は、広島市の約30キロ東に位置す

る東広島市の農村を担う当していた。作業中、西の山の間から光線が放たれ、きこえた雲が見えた。何が起きたか分からなかったが、3日後に降り立った広島駅で目の当たりにしたのは「がれきの野原」。周辺は熱気と臭気で満ちていた。

の少女の懇願だったが、「水を飲むと死ぬ」と聞いていたから『だめですよ、頑張ってください』と言った、『海ゆかば』を歌いながら死んでしまった。目の前で」。69年がたった今も、目に浮かぶ。

「久保田さんは、話せて良かったと言ってくれた。思い出したくない記憶を伝えようとしてくれたその思いも受け取りたい」と法文学部総合政策学科3年上村彩さん(20)。愛媛で周囲の人と話し合うことが自分たちの責任だと力を込めた。

広島市出身で法文学部人文学科4年宮崎優季さん(21)は日ごろから平和を意識する必要性を痛感。「被爆者がいなくなる中、私たちが平和への願いを引き継いでいかなければ」と決意していた。

(中田知子)